

新美術新聞 2010(平成22)年3月11日(木) 寄稿

人と自然の共生

大隈武夫展

おおくま

たけお

今回の展覧会は大隈武夫氏の代表作40数点、摩美術大学在学中に二科による初の回顧展である。これまでの個展の集大成となるもので、中学2年生のときに画家を志して、爾来60有余年、画業を回顧する品によって、西洋絵画の伝統に生きる生命の樹と云える。

氏は、1955年、多摩美術大学在学中に二科展に初入選し、その後二科展を発表の場とした。郷里の大先輩で二科会の松本弘二（1895〜1973）に師事。昭和40年代には樹木を描いた作品によって、西洋絵画の伝統に生きる生命の樹と云える。



「沙漠に群る薔薇」 150号 2008年



「沙の大地・祈り」 130号 2002年

向かう心の原点となっていた。1971年、二科会会員推荐の

そこを暮らす人々が織りなす形と色の幅狭した生活を、氏は描くことになったという。ことではなかったか。氏においては、自然との共生は終始一貫したテーマだったのである。1991年に描かれた「有明海の夜明け」には、見晴かす養仙と興境の多良岳が茜色と紺色のシルエットに浮かび、画面中央へと向かうみおすじの遙か先には黄金色の空が輝いていた。インドを語ったあたりでは、この原風景とも言える「有明」の温和な地に、インドの熱い色彩

失われゆく自然と

共にあった生活の営み

松本誠一

年に「榕樹の郷」を描く。ガジュマルと言われ、人間の命に思い至ることになったという。その奇怪とも見える樹形

もの生命と対峙して描いたが、インドの大地に生きる人々からモチーフを得、「自然」に生きる人間の命に思い至ることになったという。その奇怪とも見える樹形

が共鳴しているかのようにも思えるのである。（佐賀県立美術館副館長）
★3月16日（火）〜22日（月）
3号展示室（佐賀市城内1-15-23） ☎0952-24-3947 休会期中無休 休館無料